

〈論文〉

同性愛男性の身体

玉城 寿樹

第1章 問題の所在

社会学において美に関する議論はもっぱらジェンダー論の中で論じられてきた。ここでは「男性＝「見る」主体／女性＝「見られる」客体」であり、女には美しくなければならぬという「美の規範」が社会的に要請されているという見方が支配的である。そして、女性は美しさを追求し、その結果、摂食障害に陥ったり、美容整形といった危険性の高い行為に及んでしまう可能性が高く、そこには男女の美の非対称性が存在することが指摘されてきた。

しかし、「見られる」客体は女性だけなのか。1990年代末以降、男性も「見る」主体をはく奪され、「見られる」客体となっているという指摘もあるが（北村，2021:119-120）、同性愛男性¹はそれより前から男性を「見る」主体であると同時に（同性愛）男性に「見られる」客体でもなかったのか。同性愛男性の世界は外見重視であると指摘されることも多い。そのため、同性愛男性にもまた女性と類似した「美の規範」が存在しているのではないか。

そこで本稿では現代日本の同性愛男性の身体が置かれている状況を明らかにすることを目的とし、それを踏まえて「男性身体の客体化」²についても論じる。まず、身体、

1 本稿では、「同性愛男性」という用語を使用することが多いが「ゲイ男性」や「ゲイ」といった用語と互換的に使用している。

2 ジェンダー論で「女性身体の客体化」が問題視されるのは、性的客体化（それ自体を道徳的に悪いということは難しいことにつき、江口聡（2006，2019）を参照）と女性差別的な社会構造が密接につながっているからである。そのため、「男性身体の客体化」を問題視す

男性性、同性愛男性、「美」が社会学の領域においてどのように論じられてきたかを先行研究やネット上の言論を概観する。その後、先行研究でほとんど見過ごされてきた問題に言及し、インタビュー調査で明らかになったことを考察していく。

第2章 先行研究

2.1 ジェンダーと身体

マーゴ・デメッロが「ジェンダーほど身体研究の分野で徹底的に議論されてきたトピックはないだろう」と述べているように、身体と性差は切り離すことができない事柄である（デメッロ，2017:91）。私たちは生まれた瞬間から性別を判断し、また判断される。身体的性差はどの成長段階においても否応なく意識させられる事柄であり、身体は男と女を判断する際の最も重要な根拠とされる。すなわち、身体は男女の枠組みを利用して理解されている側面が強い。

荻野美穂は『ジェンダー化される身体』において身体の歴史をジェンダーとの関連で論じている（荻野，2002）。そこで中心に論じられているのは女性の身体である。荻野に限らず、ジェンダーと身体の関係についての議論は多くの場合が女性の身体である。なぜ男性の身体は研究されてこなかったのか。その理由として荻野は「人間＝男という前提がほとんど空気のように意識されないまま内面化されてしまっていた世界では、かえって男は自分を「男」として対象化して見る契機を失ってしまったのではないだろうか」（荻野，2002:113）とする。また「西欧の伝統的指向である霊肉二元論にあっては、もともとより優位の項である精神を男性に、劣位の項である肉体を女性に割り当てるというジェンダー観が存在していた」という点も男性の身体が対象化されてこなかった点として挙げている（荻野，2002:370）。デメッロにおいても、男性は何をするか、何を成し遂げたかによって規定されることが多いのに対し、女性

るのは原理的に不可能である。しかしながら、具体的なレベルに引き直すことにより、「男性身体の客体化」を問題視することも可能であると思われる。すなわち、ジェンダー論は性的客体化とそれによる弊害（過度なダイエット、危険性の高い美容整形へ走るなど）を「女性身体の客体化」として問題にしている。このレベルで問題をとらえるとき、男性にも何らかの弊害（過度なトレーニングによる健康の棄損など）があることを指摘できれば「男性身体の客体化」を問題視することが可能である。

以上を前提にして、本稿で使用する用語の意味を予め整理する。まず、「見られる」客体といった用語は価値中立的な意味合いを持たせての使用、つまり、性的客体化それ自体を意味する。そして「(男性/女性)身体の客体化」といった用語は、性的客体化とその弊害を含めて使用する。

は生殖能力に加え、どう見えるかによって規定されることが多いという多くのフェミニストの指摘について紹介している（デメッロ、2017:94-95）。

このように身体は女性の領域とみなされ、男性の領域としてみなされてこなかったきらいがある。

しかしながら、近年になって男性の身体へのまなざしも増えつつある。男性の外見的理想像がいかにかに形作られるかをフィジカル・カルチャー雑誌の分析を通して明らかにしようとする岡田の研究やハゲた男性の生きづらさに焦点を当てた須長の研究などがある（岡田、2006、須長、1999）。

男性と身体の関係が注目されるようになった背景の一つには男性性や男らしさといった問題が脚光を浴びるようになったことが考えられるだろう。一枚岩に捉えられ、フェミニズムにおいて非難の対象とされることが多かった男性が、自分自身について語ることでこれまで男性像を修正しようとしてきた。次節では男性性について論じる。

2.2 男性性

男性性³とは何であろうか。多賀太は、社会構築主義の立場にたてば「男性性と女性性は、身体のあり方と社会的定義との相互作用によって社会的・歴史的に構築されるもの」であり、「普遍的・超歴史的な男性性（女性性）の定義などは存在せず、特定の社会的・歴史的な文脈においてのみ「男性性とは何か」という問いに答えることが可能となる」とする（多賀、2006:19）。そのため、男性性とは何かといった問いは適切ではなく、ある特定の文脈において、男性性とされるものは何かと問うべきであろう。岡井も「男性性を表す用語の意味を同定することやある男性性のパターンを一般化することよりも」、「いくつもある多様な男性性をそれぞれの文脈において考察することの重要性」を指摘している（岡井、2009:27）。この指摘を踏まえ、本稿では身体および同性愛男性という文脈における男性性に関する先行研究を紹介する。

身体と男性性とは何か。身体における男性性は多くの場合、女性との身体的差異に基づいて考えられる。大山治彦は「身体の男らしさ・女らしさとは、性別の違い

3 多賀太は、男らしさは肯定的なニュアンスを含むのに対し、男性性は価値中立的な概念であるとして区別している（多賀、2006:19）。本稿では男性性、男らしさを区別せずに用いる。なぜならこのような区別を意識して使う研究者と、意識せずに使う研究者がいるため、引用文において用いられている男らしさや男性性の区別をすることは困難と考えられること、また本稿において区別する意義が明確に認められないからである。

によって、その身体に対して社会的に期待される特性」と定義づけている（大山，1995:69）。デメッロは西欧において男性は力強さが求められ、女性よりも背が高く、体が大きく、筋肉が求められるという（デメッロ，2017:106）。日本においては藤田智子が青年期の男性において、高い身長や筋肉質な体型が男性の身体であり、背が小さいのが女性の身体として認知されていると指摘する（藤田，2005:84-90）。伊藤公雄は、男子学生に対し自分が男らしいかどうかの質問をしたところ、自身の身体的特徴（体格の大きさ、力の強さ）をあげて回答することがほとんどであったことを述べている（伊藤，1997:23）。これらの指摘を踏まえると、西欧においても日本においても、男らしい身体と結びつけられるのは体格の大きさである。

次に同性愛男性と男性性の関係性はどのように考えられてきたのだろうか。

河口和也は「同性愛研究においては、「男性性」とは極めて矛盾をはらんだもの」であり、「男性性」、とりわけ「覇権的な男性性」とは、一面でゲイ男性が極めて強く惹かれるものであると同時に、ゲイ男性を強固に抑圧するものでもあった」と指摘する（河口，2004:140）。

このことと関連した研究が、若年ゲイ男性のライフストーリーを通して男らしさ規範とセクシュアリティの関係を論じる大島岳の研究である（大島，2016）。大島は「男らしくない」とされ、いじめや性暴力を受けたゲイ男性が危険に身を晒しリスクをとることにより、性的快感を強めるような「性的冒険主義」に向かうことを指摘する。「性的冒険主義」は男らしさとリスクの伴うセックスとの結びつきによる快楽を意味し、具体的には集団セックス、薬物使用といった実践を指す。つまり、「性的冒険主義」という男らしい行為に走ることで「男らしくない」とされたゲイ男性が、男らしさ規範がもたらした暴力や支配、排除といった困難から回復（男性性を獲得）しようとする。

以上のように、男性性は身体、同性愛男性とも密接につながっている。身体においては体格の大きさが男らしさとつながる。また、同性愛男性は同性を愛するがために、男らしさを喪失した男性となり、覇権的男性性に憧れる男性となる。そして男らしさを取り戻すために性的冒険へと走る可能性がある。

次節では、同性愛男性の出会いと外見についてみていく。

2.3 同性愛男性

1990年代前半まで同性愛男性が他の同性愛男性と出会う方法は、ゲイ雑誌の文通

欄を通してであったり、ゲイバーであったり、ハッテン場⁴であった。しかしながら、1990年代後半以降はインターネットの出現により、2000年代後半以降はスマートフォンの普及により、出会いの方法が大きく変化する。1990年代後半以降はインターネットサイトに様々な同性愛男性向けの出会い系掲示板が出現し、そこが出会いの主流となる。また、2000年代後半以降、スマートフォンの同性愛男性向けアプリを用いた出会いが主流となり、現在も多くのゲイ男性がパートナーや性行為の対象を見つける際に活用している。多くの同性愛男性向けアプリはGPS機能が搭載され、自分の近くにいる同性愛男性の情報がわかる。そこで開示される情報は、自身の写真、年齢、体重、身長、ポジション⁵などである。自由記述欄やフィルタリング機能もあり、自分がどういう人間かをアピールし、フィルタリング機能を使って興味のない相手の情報をシャットアウトすることもできる。

同性愛男性の多くが利用する同性愛男性向けアプリの仕様は上述のとおりであるが、アプリの仕様を考えると他者と出会うには、外見の情報が重要とされているという点に注目したい⁶。異性愛者向けの出会い系アプリも外見重視であると思われるが、同性愛者の出会いは、アプリにおいての出会いが主流を占めているという点で異性愛者向けアプリと異なる。つまり、異性愛者はアプリを使わなくともありきたりな出会い（例えば、学校のクラスメイトを好きになって告白する）によって恋人を探すことができるのに対し、同性愛者は、異性愛主義社会においては恋慕を抱いた相手に告白することがカミングアウトを伴うことになってしまう。誤解を恐れずに言えば、アプリを使って恋人を探すことしかできないのである。この違いは、恋人を探す際に外見以外の諸要素を含めて恋人探しをできるか否かに現れてくる。異性愛者は出会いの間口を拡げるために出会い系アプリを使用する一方で、同性愛男性は出会いを求める際のスタートが出会い系アプリとなるといえよう。このことを考えると同性愛男性は出会いを求める際に専ら外見によって判断されるといっても良いだろう。そして、外見を磨くことが要請されるといってもよい。

4 ハッテン場とは不特定の同性愛男性が性行為をするために集まる場のことである。ハッテン場には、公衆トイレや公園といった公共施設を利用する屋外・無料のハッテン場とビル等を間借りした屋内・有料のハッテン場がある。

5 ポジションとしてタチ、ウケ、リバがある。一般的にタチとは肛門への挿入を伴う性行為において挿入する役割を担うものを指し、ウケとはネコとも呼ばれ、挿入される役割を担うものを指す。リバはタチ、ウケどちらも可能な者を指す。

6 外見以外にも自由記述欄やメッセージのやり取りをする際の言葉遣いも自身を商品として宣伝するためには重要である（木谷・河口，2021:9-10）。しかし、外見が最も重視されていることに異論はないと思われる。

伏見憲明は同性愛男性について「見た目の記号ゲームがシステム化されすぎていて、奇跡が起こりにくい状態になって」おり、同性愛男性の世界は「ルックス至上主義」であると指摘している（伏見，2000:40）。

では同性愛男性は多くのアプローチを受けるためにどのように外見を整える必要があるのだろうか。ここでキーワードとなるのが「短髪・髭・筋肉質⁷」である。検索エンジンに「短髪・髭・筋肉質」というワードを入力すると、数多くのゲイについて書かれた記事がヒットする。そこでは「短髪・髭・筋肉質」というワードが「ゲイ」というワードと密接につながっていることがわかる。しかも、「短髪・髭・筋肉質」といったワードが好まれるゲイ男性の特徴として書かれている。

このことをふまえると、好まれる同性愛男性は「短髪・髭・筋肉質」の三拍子がそろっていると考えてもよいだろう⁸。

ここで同性愛男性を被写体として撮影した写真家・下村しのぶのインタビューに対する応答を取り上げる。異性愛男性と、ゲイ男性とのどちらの方に惹かれるかどうかという質問に対して次のように答えている。

ゲイの人たちです。ゲイの子たちは身体を見られることにすごく敏感。例えば、身体をつくることや、いかにきれいに見せるか、渋さであったり、自分の身体の筋肉のラインであったり……そういうことはストレートの男の子は考えないですよ。女の子相手だと、別の性別として自分を見ているから、どんな身体づくりだっていいじゃないかとなる。ゲイの子たちというのは同性同士だから、いかに自分を美しく見せなくちゃいけないかを知ってると思うんですよ。だからボディラインがすごいです。（伏見，1999:51）

下村はゲイ男性の身体と異性愛男性の身体を対比して、ゲイ男性の身体に対する意識の強さを述べている。ゲイ男性は身体に対して強いこだわりを持っているといってもよいだろう。その身体へのこだわりはマッチョへのこだわりであることが下村の他の

7 「筋肉質」の内実は明らかでないが、おそらく引き締まった体格というより、がっちりした体格を指すと思われる。もちろん引き締まった体格を含む可能性もある。

8 ゲイ・シーンにおいては「イカホモ」という言葉があり、それは外見を見ただけで同性愛男性とわかる男性を指す。この言葉には、短髪・髭、がっちりした体格が含意されることが多い。もちろん、そのような外見をした男性が同性愛男性であることの実証はない。ここでは、好まれるとされる同性愛男性の特徴と「イカホモ」におおよそ一致がみられることを確認したい。

質問に対する応答で述べられている（伏見，1999:56）。

もっとも、同性愛男性の皆が皆、「短髪・髭・筋肉質」を好んでいるわけではない。異性愛男性にも好みがあるように、同性愛男性にも好みはある。むしろ同性愛男性は外見に対しての好みが多分化されており、どのような同性愛男性でも需要があるといわれることもある（森山，2014:248）。だが細分化されているとはいえ、同性愛男性が好むとされる身体が存在することを否定することにはならない。例えば、異性愛男性が好む女性のタイプが様々であっても、好まれる（美しい）とされる女性は西洋的な美の基準に合致する女性である。つまり、（好まれるとされる）中心的な身体は存在するのである。

同性愛男性に好まれるとされる「短髪・髭・筋肉質」は、男らしさと結びつけられるものである。また、同性愛男性は外見の男らしさを（恋愛対象とみなされるために）自身にも、（恋愛対象とみなすために）他者にも求めているとも考えられる。そこでは「女らしさ」は求められておらず、むしろ忌避するものとして捉えられる⁹。

ここまで同性愛男性について論じてきたが、次節ではジェンダー論における「美」についての議論を概観する。

2.4 「美」の非対称性

外見における「美」に関する問題は、フェミニストによって美容整形や、ミスコン、摂食障害、ダイエットなどと親和的に語られてきた。ナオミ・ウルフは、男性社会によってつくられた、女は女らしくあるべきという神話が第二波フェミニズムの興隆により崩壊した後、美しくあるべきという「美の神話」が女性に押し付けられている¹⁰とする（ウルフ，1994:13）。

飯野智子は、「美」は女性の「性」（セクシュアリティ）を領域とし、主に美容産業を通して「商品としての身体」に働きかける一方で、男性の身体は、「近代産業社会に適合的な合理的身体として装飾性が否定され、「美」から疎外され」たと指摘

9 金城（2010:56-58）、風間・河口（2015:170-173）、島袋（2021:32-33）など。

10 このような見方に対しては、女性が主体的に「美」に励む側面を捨象しているのではないかという批判がある。この点に関しては西倉実季（2005）が「美を論じるフェミニズムの課題」として「抑圧としての美」と「規律実践としての美」というパースペクティブの成果と問題点を指摘することで、対立構造を明確に示している。また、関連する論考として高橋幸（2021）がある。

している（飯野，2006：153-154）。また、萩野は男の身体が「美」に関する議論にのぼらない理由について、「身体や顔の美醜といった外見に、その人間の価値評価の基準としてきわめて低い順位しか与えないという文化的合意（「男は顔じゃない！」）が存在しており、一般に自我意識と身体との結びつきが女よりもはるかに希薄なためである」と述べている（萩野，2002:369）。つまり、女性と男性では身体に対する「美」への拘束力はかなり異なっている。

もっとも、近年男性にも外見を磨くことを要請されているという指摘も存在している。細谷実は「女たちが能力によって相互に序列化されるようになってきた（＝女女間格差）のと並行して、男たちの間にも美醜による序列化が浸透してき」ており、「かつての男の評価軸と女についての評価軸との乗り入れが生じている」と指摘している（細谷，2008:72）。前川直哉は、「やおい」のような二次元の世界のみならず、三次元においても「見られる男性、見る女性」という構図が普及してきていることを指摘しており、男性自身が「見られる」客体としての自覚を持ち始めている¹¹とする（前川，2012:140-141）。また、ハゲている男性について研究を行った須長史生によれば、男性がハゲていることを恥ずかしがるのは、男性も服や靴といった装飾的な部分だけでなく、身体そのものにも関心を払わざるを得なくなったためと考えるのが代表的な見方の一つであるとする（須長，1999:7）。

しかしながら、同性愛男性は「見られる」客体として、多くの異性愛男性が「見られる」客体を（女性と比べてかなり弱い）引き受ける前から存在し続けているのではない。千葉雅也は「日本の（主に異性愛の）男性は、九〇年代末以降、画期的に（これは一仮説であるが）、もはや容姿を見られ評価されることを女性に比べて弱い引き受けで済ませつつ女性の容姿を見る主体>であるという特権を、どんどん剥奪されていっている」と指摘する（千葉，2014:8-9）。この千葉の指摘で注目したいのが「日本の（主に異性愛の）男性」という部分である。このことから考えられるのは、同性愛男性は、異性愛男性と「見る／見られる」という関係において違う状況にあるのではないかということである。すでに述べたとおり、同性愛男性は外見が重要視されるため、同性愛男性に「見られる」客体であると考えられる。それと同時に、男性を「見る」主体としても存在していると考えられる。すなわち、同性愛男性は、90年代末よりも前の時代からずっと「見られる」客体としての地位と同時に「見る」主体としての地位にあったと考えることができないだろうかということである。また、女性に

11 ただし、依然として女性が性的な主体になること、つまり「見る」主体になることの抑圧は大きいとする（前川，2012:140-141）。

押し付けられている「美の規範」と類似した規範（マッチョでなければならない）が、同性愛男性にも存在していると考えられることもできる。そして、もし規範が規範として機能しているのであれば、「(同性愛)男性身体の客体化」の萌芽（女性には画一的な「美の規範」があることが、摂食障害等の弊害の前提となるため、ここでは「規範」を萌芽と呼ぶ）を見出すことができよう。

ここまで先行研究を概観してきた。ここでは先行研究の限界を指摘した上で、本稿の意義を確認する。

先行研究の限界点としてまず挙げられるのが、同性愛男性は「見られる」男性である可能性が高いにも関わらず、男性の身体は語るに値しない、対象化できないものとして捉えられてきてしまったために、彼らの身体はほとんど描かれていないという点である。女性の身体と同じ立場にある可能性のある同性愛男性の身体を描くことは同性愛男性の世界を考えること、男性の身体一般を捉えることに貢献することになる。

二つ目に、「見る／見られる」の視線の構図は異性愛的図式が前提とされており、同性愛男性はそこに存在していない点である。視線の構図においては同性愛男性が女性を「見る」ことはないため、同性愛男性を捨象するのは当然であろう。だが、「見る」性にも「見られる」性にもなり得ると考えられる同性愛男性は女性にも異性愛男性にも親和的であり、視線の構図における各主体のカテゴリー移動の可能性を考える際の格好の主体である。つまり、同性愛男性は視線の構図の攪乱あるいは均質化を考えるにあたって、示唆的な存在であるということである。

以上の限界点を踏まえたうえで、本稿は現代日本で同性愛男性の身体の置かれた状況を明らかにし、そこから敷衍して「男性身体の客体化」を論じる。

第3章 調査概要およびインタビュー分析

3.1 調査概要

以上の問題意識に基づき、今回の調査では機縁法により協力者を募り、ゲイ及びバイセクシュアル男性¹² 5人を対象とした一対一の半構造化インタビューを行った。期間は2018年3月から9月である。時間は40分から80分であり、場所は閑静なカフェで行った。追加調査も行っており、メールで質問をし、回答を得たのが2名で、残り

12 両性愛者であるバイセクシュアル男性も調査協力者に含んでいるが、「見る」性であり、「見られる」性でもある可能性が高いのは同性愛男性と同様であり、何ら調査に影響はないと考える。

の3名には直接質問をして回答を得ている（全員に同じ質問を1問のみ行った）。

調査協力者は学生4人、社会人1人の計5人で、全員20歳前後である。若年層に限定した理由はおしゃれやモテに対して敏感な年ごろであるため外見について語りやすい（外見について語る言語を持ち合わせている）と考えるからである。なお出身地は東海地方、東北地方、九州・沖縄地方であり、大都市圏の出身者はいない。ゲイ男性が3人、バイセクシュアル男性が2人であり、調査当時パートナーがいるのは1人である。また、やせ型又は標準体型であり、太った協力者はいなかった。

機縁法により調査協力者を募っていること、若年層のみを対象としていること、大都市圏の出身者がいないことを考えると、調査の結論の過度な一般化には慎重にならなければならない。しかし、少ない人で5人、多い人で40人と調査協力者の全員が他の同性愛男性と現実で出会っていること、また、全員がネット上で同性愛男性と接触していることを考慮すると、ある程度の一般化を試みることができると考えている。

調査協力者にはインタビューの内容を使用する許諾を得ている。また、調査協力者が特定されないように協力者は全て仮名のAさん～Eさんとする（A～Eと表現することもある）。

3.2 外見至上主義およびその抵抗

伏見（2000:40）は同性愛男性の世界は「ルックス至上主義」であると指摘しているが、インタビューにおいても伏見の指摘通り外見が重要視されていると感じる人が多かった（C以外全員）。その理由は大きく分けて二つある。第一に出会いが外見に規定されているからという理由である（B、D）。同性愛男性はほとんどがネット上の出会いであり、外見以外の情報が少ないため、外見が重要視される。第二に生物学的に男性は相手を外見で選ぶからという理由である（A、E）。異性愛男性は女性を外見で判断する。それを同性愛男性に当てはめれば、男性を外見で判断する。この二つが外見至上主義の理由として挙げられる。さらにEさんは同性愛男性にはヒエラルキーがあり、それが外見至上主義を強化していると語る。ここでいうヒエラルキーとは出会い系アプリ内でのレベルのことである。レベルは他者からのアプローチの量に応じて変化する。レベルが高いほど多くのアプローチを受けていることを表し、魅力的な男性であることの証左となる。このレベルの違いがEさんのいうヒエラルキーである。以上のように同性愛男性は外見が重要視される状況にあると言えよう。

ならば、外見至上主義であることに抵抗したい（内面も見てほしい、外見以外を磨く）と思うことはないのだろうか。筆者はインタビューにおいて外見至上主義への抵

抗について質問を行った。だが誰一人として外見至上主義の同性愛の世界に抵抗感を示す人はいなかった。Bさんは次のように語る。

筆者：ゲイって見た目から入るじゃない？もっと中身を見ろとか思ったりする？
Bさん：そんな思わないかな。別にそういう人に好かれなくていいかな。そういう人は、そういう人でいいんじゃない。

Bさんは出会いが外見から入ることに対して抵抗感を示さず、外見でしか人を判断しない人は関わる必要のない人だとする。このような発言はCさんにも見られる。また、Dさんは自分も外見で出会う人を判断するため、当たり前のこととして理解している。彼らは外見が重要視されることを自覚しながらも、外見を評価されることに対しては何ら疑問を付さない。

3.3 同性愛男性と異性愛男性の外見への意識の差異

同性愛男性は、同性愛男性と異性愛男性では外見への意識が違っていると考えるのだろうか。インタビューにおいては、同性愛男性は異性愛男性よりも外見への意識が「高い」と答えたのが3名(A,C,D)、「変わらない」と答えたのが2名であった(B,E)。Cさんは次のように語る。

筆者：ヘテロ（異性愛）の男性とゲイでは外見へのこだわりが違うと思うか。
Cさん：違うと思う。感覚的には。
筆者：その感覚はどこから？
Cさん：ヘテロの人たちは外見にこだわっていない人の割合が多いかなって思って。その理由もなんか感覚的なモノなんだけど、自分の外見が大事ってことをわかっていない人が多いんじゃないかな。外見っていうのを顔が整ってるとかそういうのじゃなくて、なんていうのかな、

Cさんは異性愛男性が外見の重要性をわかっていない一方で、同性愛男性はそのことをわかっていると述べる。これはDさんの「(異性愛男性は)何もしない人はほんと何もしないみたい。小学生のままみたいな感じの人が多と思いますね。」という発言と同様のことを意味していると考えられる。他方、Bさんは外見への意識が「変わらない」と答えながらも、自分の仕事柄(美容師)おしゃれな人たちと関わること

が多く、自分の感覚がズレているかもしれないとも考えている。また、同性愛男性はモテるために体を鍛える人が多いという。体を鍛える人が多いと考えるのはAさんも同様であり、同性愛男性が自分の身体をSNSにアップすることに言及する。

このように調査協力者は、同性愛男性は異性愛男性よりも外見への意識が高いもしくは変わらないと感じており、低いと感じている協力者はいない。

インタビューからは外見への意識に二つの方向が見いだせるだろう。1つは「身だしなみ」としての外見である(C,D)。もう一つは「身体的男らしさ」としての外見である(A,B)。ただここで注意しなければならないのが、調査協力者自身が「身だしなみ」と「身体的男らしさ」を求めているというわけではなく、彼らが同性愛男性一般に抱くイメージとしてそう感じているということである。では自己の外見(身体)へはどのような意識を抱いているのだろうか。

3.4 自己の身体への意識

同性愛男性の自己の身体への意識はどのようなものだろうか。インタビューからは意識が高い人(C,D)、意識が高いとも低いとも言えない人(B)、意識が低い人(A,E)が存在し、個々人によってかなり差異があることが分かった。そのため、同性愛男性一般が自己の身体にこだわりをもっているとは一概に言えない。意識の高いDさんは外見を磨くために腹筋や水泳といった運動をしており、また、剃毛し、日焼け止めも塗るといふ。さらには自身の横顔に不満を抱いており、「Eライン」といった男性からほとんど発せられない単語を口にする。また、髪の毛への言及、顔のタイプへの言及も行い、不満をあげれば「キリがない」といふ。同じく外見への意識が高いと思われるCさんは口を閉じたときに頬が左右対称にならないことが不満と述べる。このように多くの男性に意識されないであろう「Eライン」や「頬の対称性」に言及することは自身の外見への意識が男性の中で高いといえるだろう。この二人と対照的に外見へのこだわりが低いと思われるのがAさんとEさんである。Eさんは自分の外見に満足していないと答えながらも、外見をどうにかしようという意識があまりみられない。

筆者：自分の外見をよくするためにやってることある？

Eさん：例えば？

筆者：筋トレとか化粧とか

Eさん：してない

筆者：なんもしてない？人に見られるためにしてることはない？

Eさん：服装ぐらい。でも服装も適当だしな基本。服装は友達に選んでもらってる。

このようにEさんは何もしてないという。だがEさんはモテたいと考えている。筆者がモテたいといいながらも外見を磨こうとしない理由を尋ねたところ、外見は最初だけであり、会えば性格的に会話ができるから問題ないとEさんは回答した。Eさんにとって自分自身の外見は重要度が低いものであるといえよう。

以上のように調査協力者の自己の身体への意識はさまざまである。だが意識が高い人も低い人も同性愛男性のコミュニティは外見重視であると感じているのは前述のとおりである。

3.5 同性愛男性に好まれる身体

同性愛男性にはいったいどのような身体が好まれると考えられているのだろうか。Aさんは「クマデブ、あごひげマッチョ」、Bさんは「マッチョ」、Cさんは「ムッチリ¹³」、Dさんは「引き締まった体型」の男性が同性愛男性に好まれていると考えている。Bさんは女性にも「マッチョ」は好まれると考えている。Eさんは若年層（20代後半まで）と高齢層（30代前半から）の同性愛男性では好まれる男性が異なると考えており、前者は世間においてイケメンとみなされる男性、後者は「ガッツリ系、ムチムチ系」の男性である。

Eさんのいう若年層に好まれる男性を除けば、女性身体との比較において、同性愛男性が好むとされる身体は男らしいとみなされる身体であろう。また、Eさんのいう若年層に好まれる男性、Dさんのいう「引き締まった体型」の男性を除けば、同性愛男性が好むとされる身体は、男性身体との比較においても大きめの体格であるといえるだろう。すなわち、調査協力者の多くは男らしい身体が好まれると考えており、その中でも体格の大きい身体が好まれると認識しているということである。これは先行研究やネット記事とほぼ一致していると言えよう（以下、このような同性愛男性に好まれるとされる大きめの体格の男性身体を「好まれる男性身体」と定義する）。で

13 ムッチリは女性らしい身体と捉える者もいよう。だが、ゲイ・シーンでは体格の良い男性を区別するための用語としてGMPDと呼ばれるものがあり、左から順にガッツリ、ムッチリ、ぽっちゃり、デブを意味する。そのため、Cさんの言う「ムッチリ」はGMPDのMに相当する可能性が高い。

はそれぞれの調査協力者が好む男性身体は、「好まれる男性身体」と一致するのだろうか。

3.6 調査協力者が好む身体、好まない身体、理想とする身体

どのような男性身体を好むかインタビューしたところ、Aさん、Dさんは「スポーティーな（引き締まった）身体」を、Bさん、Cさんは「普通体型の身体」を、Eさんは「太ってない身体」を好むと答えた。ここで特筆すべき点は、誰一人として「好まれる男性身体」をあげなかったことである。それだけにとどまらず「好まれる男性身体」を好まないとすると答えたのがCさんを除く全員である。Bさんは次のように語る。

筆者：なぜ、ゲイにモテるのはマッチョと思うようになった？

Bさん：Twitterとかでマッチョの人が自撮りをあげていいねがいっぱいついていたり。あとやっぱテレビとかでそういう感じでやってるしき。別に俺は興味ないけどさ。よくいう二丁目の人とかはそういうのが好きなんじゃない？

筆者：ゲイにモテるような男性は自分のタイプではない？

Bさん：ない、全く。

Bさんはマッチョが好まれると考えた理由としてSNSにアップされた自撮りへのアプローチの数とテレビにおける表象をあげる。そしてそのように好まれるとされる男性を「俺は別に興味ない」と一蹴する。「マッチョ」のような大きめの体格に魅力を感じないとする発言はA,D,Eにもみられる。Cさんは「美意識が高い人」を好まないと答え、大きめの体格を好まないとも好むともしない。

「好まれる男性身体」が称揚されていないことは自分の理想とする男性身体に誰一人として「マッチョ」をあげないことからわかる。理想とする男性身体は「程よい筋肉のついた身体」(A,B,D)、もしくはそのような身体は存在しない（考えたことがない）(C,E)と調査協力者は答えた。

このようにインタビューからは同性愛男性に「好まれる男性身体」を好む協力者は存在せず、むしろ好まないと答える協力者が多い。また、理想とする男性身体と「好まれる男性身体」は一致しない。いわば「好まれる男性身体」と調査協力者が好む男性身体、理想とする男性身体には乖離が見られる。

第4章 考察

4.1 「好まれる男性身体」の形骸化

明らかになったことは次の点である。

第一に同性愛男性は外見至上主義の世界に属しており、そのことを認識しながらも、「見られる」性としての意識は個々においてかなりの差異があるということである。

第二に「好まれる男性身体」と調査協力者が好む男性身体、理想とする男性身体には乖離が見られる点である。

まず第二の点について考察する。

調査協力者らは同性愛男性には大きめの体格の男性が好まれると認識しており、ネット記事、先行研究においても同様のことが指摘されているが、インタビューにおいて自身が好む男性、目指すべき理想の男性としてそのような男性をあげる者は存在しなかった。それどころか、ほとんどが「好まれる男性身体」を好まないとして、恋愛対象から除外している。

ここから、同性愛男性の外見に対する「規範」は形骸化している（又は機能不全となっている）と指摘できる。先行研究等から筆者は大きめの体格（マッチョ）が同性愛男性の身体における「規範」とみなすことができると考えていた。しかし、インタビューにおいて若年層同性愛男性において「好まれる男性身体」が自身の好む男性身体、理想とする男性身体と乖離していることが明らかになり、「好まれる男性身体」は規範として機能していないことが示唆される¹⁴。このことを踏まえると、同性愛男性には女性における「美の規範」と類似した「規範」が形骸化しているために、「見られる」客体としての意識を内面化することが女性と比べて難しい状態となっているといえるだろう。そのため、同性愛男性が女性と同様に「見られる」状態にあるということとはできない。

ここで注意したいのは、筆者は、同性愛男性は異性愛男性と同様に「見る」主体であり、「見られる」客体の引き受けはかなり弱いと結論を出しているのではないとい

14 筆者が東京と大阪にあるハッテン場のホームページやハッテン場まとめサイトを閲覧したところ、若者向け（20代中心で30代まで）ハッテン場ではガチムチ系（本稿の「好まれる男性身体」に当たる）はターゲットとなっていない一方、40代まで入店可能な店や誰でも入店可能な店はガチムチ系もターゲットとなっている印象を受ける。もっとも単なる印象であるため、ハッテン場の経営者や利用者に取り組み調査を行ったり、フィールドワークを行う必要がある。

うことである。あくまで同性愛男性は女性のように「見られる」客体にはなり得てないということであり、異性愛男性に比べれば相対的に「見られる」客体であると考えている¹⁵。

もっとも本稿と相反するような主張が木谷幸広・河口和也（2021）の研究である。木谷・河口はゲイ向けマッチングアプリを分析し、サイバー空間が出会いの主流になることでゲイの身体に変容が起きているとする。彼らの主張によると、ゲイは、ゲイ向けアプリで人気になる見た目になるよう短髪にし、髭を生やし、体を鍛える傾向があるという¹⁶。ここで人気になる見た目とは男らしい男¹⁷である。すなわち、彼らの主張は規範が規範として機能していることを指摘する。

しかし、彼らの研究は、マッチングアプリの機能やサービスを記述し、それらの機能やサービスの特徴からゲイの身体が変容したと主張するのみである。マッチングアプリを計量的に分析し、その傾向があることを明らかにしたものでもなく、インタビュー等により同性愛男性の主観的な意味を明らかにしたものでもない。言い換えれば、彼らは同性愛男性がマッチングアプリの影響を受ける受動的な主体（あるいは規律=訓練された主体）であることを前提としており、分析として不十分である¹⁸。

したがって、木谷・河口の主張は直ちに受け入れられるものではない¹⁹。

-
- 15 異性愛男性よりも同性愛男性が「見られる」客体であることは先行研究やインタビュー記事、美容産業において同性愛男性が重要な地位を占めていたこと、インタビューの結果を考えると揺るぎのない事実であろう。
 - 16 その他に男らしい男であることを自己呈示するため、自己紹介欄にジム通いであること、体育会系であること、性欲が強いこと等が書かれるという。
 - 17 石田仁はゲイ向けアプリで「人気ユーザー」となるのは、男らしい男が多く、それをみたゲイは自分の外形的な「男らしさ」を磨くとする（石田，2019:164）。そして、木谷・河口はそれに同意する（2021:8）。ここで男らしい男がどのような外見を指しているのかは明らかでないが、本稿における「好まれる男性身体」を指していると思われる。しかし、外形的に男らしい男が「人気ユーザー」になるという傾向と、その傾向を見ることでそれに同化していくことには距離があり、そこをつなぐ論証が必要であることは言うまでもない。
 - 18 本論とは若干離れるが、アプリ上でのメッセージや実際に同性愛男性と会うときに女性的なふるまいをすることは禁忌である、と多くの論者が指摘するように、筆者のインタビューにおいても女性的なふるまいは忌避される傾向がみられる。そうすると、「好まれる男性身体」が規範となりえていないとしても、「女性的なふるまいをしないこと」自体は規範として機能しているといえるかもしれない。
 - 19 本稿は若年層ゲイにおいては「好まれる男性身体」が規範として機能していないことを述べるにとどまり、木谷・河口の主張が全面的に誤りであると主張するものではないことに注意されたい。しかし、木谷・河口の主張のように同性愛男性向けアプリの出現により「好

ここまでをまとめると次のような構図が浮かび上がってくる。すなわち、女性、同性愛男性、異性愛男性の順で「見られる」客体となっている。そして中間に位置づけられる同性愛男性は女性と異性愛男性のちょうど中間地点に位置しているのではなく、異性愛男性にきわめて近い位置にある。このような構図は「見る」主体でありながらも、「見られる」客体でもあるはずの同性愛男性が、「見る／見られる」を同じ割合で引き受けているのではなく、「見る」主体として居座り続けており、「見られる」客体になり得ていないことを意味する。

ここまで同性愛男性が「見られる」客体になり得ていない理由として「規範」の形骸化を指摘した。次節では明らかになった第一の点について考察する。

4.2 男性ジェンダー特権を利用する同性愛男性

本節では、同性愛男性は外見至上主義の世界に属しており、そのことを認識しながらも、「見られる」客体としての意識は個々においてかなりの差異があることが何を意味するかについて論じる。その際、前川直哉の『〈男性同性愛者〉の社会史』を参考にする（前川、2017）。そのため、はじめに前川の論考を簡単にまとめよう。

前川は1920年代から80年代頃までの同性愛に関する雑誌の分析を行い、同性愛男性が、悩みの種である「カミングアウト、結婚、相手探し」をどのように解消したのかについて論じている。前川によるとこのような悩みの解決のために同性愛男性は「男性と女性の非対称なジェンダー構造、そして自身が男であることによって得られ

まれる男性身体」といった規範が強化されたと解するのではなく、（その規範はそもそもないという筋も排除されないが、）無効化（あるいは弱体化）したと解するのが筆者の見立てである。

高齢層が若年層であった時代と現在の若年層では、前者の出会いの多くが雑誌の投稿欄等が出発点であるのに対して、後者は専らインターネット上や同性愛男性向けの出会い系アプリである。後者の場合は、同性愛男性に会おうと思えば気軽に会うことができるのに対し、前者ではそのようなことはほとんど不可能である。この違いは身体にも影響しうる。若年層にとっては様々な身体をもった同性愛男性と出会う（認識する）ことがネット上においても、現実世界においても可能である一方、高齢層においては同性愛男性の身体の出会いはハッテン場や新宿二丁目といったゲイタウンがほとんどである。地方においてはそもそも同性愛男性の身体との出会いが全くないことすらあり得る。つまり、多様な身体との出会いのない高齢層は雑誌のポルノ写真を同性愛男性に好まれる身体とみなし、自身もそれを志向してしまう可能性が高いというわけである。もっとも、雑誌に表象されている身体の傾向と、自身もその身体に同化することには距離があり、それをつなぐ論証が必要であることは前述のとおりであり、今後検討が必要である。

ている特権を、無自覚に利用」してきたという（前川，2017:218）。例えば結婚についての解決策は、妻に隠れて同性と交際するにしても、妻に同性愛者であることを告白した上で同性と浮気するにしても、その背景にある男性が家庭外で浮気をすることが大目に見られるという性のダブル・スタンダードの上で成り立っている。また、夜にお店へ酒を飲みに行くこと、そこでいくらかのお金を使うことは当時ほとんど男性のみに許されており、同性愛男性はゲイバーへ行き、語ることでカミングアウトの悩みや相手探しといった悩みを解決してきたと述べる。すなわち、このような悩みに対して、「カミングアウト（クローゼットから出る）をした上で同性愛に対する差別と闘う方法ではなく、カミングアウトをせず自身の欲望を周囲に秘したまま（クローゼットに留まったまま）欲望の充足を図る方法による解決を図ってきた」のである（前川，2017:220）。

このことは「見る／見られる」という視線の構図にも応用できるだろう。すなわち、調査協力者のほとんどが、外見重視のコミュニティに属していると認識しているにも関わらず、自身の外見への意識についてはかなりの差異がみられたのは、男であるがゆえである²⁰。また、外見を評価されることに抵抗を示さないことも、男の特権を利用できるゆえのものであるとも考えられる²¹。Eさんは男の特権を利用している典型

20 女性においても意識に差異がみられるのは当然である。しかし、その差異は小さいと考えられる。大学生を想起すると、女子大学生の格好にはほとんど差異が見られない（おしゃれへの関心が最低限ある）が、男子大学生はおしゃれな学生とおしゃれでない学生が混在している状況にある（おしゃれへの関心が無い人も多い）。

21 当然、抵抗を示す同性愛男性も存在する。しかし、彼らの抵抗が成功するのは困難である。なぜ困難であるか、（本論と離れるが）以下でみていくことにしよう。

「ルッキズム」という言葉は外見を重視する価値観又は外見に基づく差別という二つの意味のどちらかで使用され、日常的な使用としては前者が主である（西倉，2021）。同性愛男性の社会は外見至上主義とされるが、その言葉は「ルッキズム」と言い換えられることもあり、そこでの使用も前者の意味である。西倉によれば「ルッキズム」概念は、英米の研究において後者の意味で使用されており、それが正当化できないことの論拠は3類型に分けられる（西倉，2021）。一方、前者の意味での「ルッキズム」が正当化できないことの論拠は未解明であるが、高橋幸がいう「外見的魅力による人間の序列化への「不当感」はその論拠の一つとしてあげられる（高橋，2021:186）。

そうすると、同性愛男性の世界の「ルッキズム」は高橋の論拠によって正当化できないように思える。しかし、高橋が主張を導出した過程を前にしたとき、その論拠が妥当しないことがわかる。高橋の主張は、セルフイー文化における自己呈示が、コミュニティ内での程度受け入れられるかを人気度の違いから説明するオランダでの議論を土台とするものであり、性別や階級といった既存のカテゴリーと異なった「社会的地位」としての「外見的魅力」が社会的な抑圧を生むとする。すなわち、画一的な評価基準で測定される外見

例であろう。Eさんは同性愛男性の世界が外見重視であると認識し、モテたいと思いつながりながらも、外見を磨くことをしない。その理由として外見は最初だけであり、コミュニケーションをとれることが重要だからという。このことは「女は顔、男はカネ（顔以外の要素）」といったジェンダー構造を巧みに利用することで、「見られる」性から距離をとり、「見る」性としての位置に男として居座り続けていることを表している。つまり、男であることを利用できるということは同性愛男性も異性愛男性と同様である。

もっとも、前川の指摘するジェンダー特権の利用の方法と視線の構図における

的魅力がコミュニティ内での人気の序列化という社会的な抑圧を生むことが示されている。これは、「非モテ」男性の苦悩を動的なものとして可視化する議論（西井，2021）とも親和性が高く、外見的魅力による序列化への不当感を個人の文脈でなく社会の文脈に位置付ける基盤（高橋，2021:186）として一定の評価ができる。

しかし、同性愛男性の世界には評価される画一化された外見の基準がないこと（「好まれる男性身体」の形骸化）を本稿で明らかにしてきた。すなわち、画一的な外見の魅力が社会的抑圧を生むということとはできない。また、現在の同性愛男性の世界は、森山のいうように特権的な他者とのつながりと総体的なつながりが分離している点にも目を向ける必要がある（森山，2012:51）。同性愛男性の世界の「ルッキズム」は前者の文脈で指摘されるものであり、コミュニティ内での序列化プロセスに着目することがほとんど不可能である。したがって高橋の論拠をもって同性愛男性の世界の「ルッキズム」を批判することはできない。

さらに言えば、同性愛男性の世界の「ルッキズム」は、個人的な文脈の最たるものである性的・恋愛関係の出会いの場面での「ルッキズム」である、という点も批判が困難であることの論拠である。吉澤夏子はフェミニストによるミス・コンテスト批判は、「美という評価基準」を、個人的・社会的を問わずいかなる場合においても使用してはならない」という主張に集約され、それは性という存在形式が一切ない社会（男／女が一切の意味を持たない社会）を理想とすることと同義であるとする（吉澤，1993:68）。しかし、ゲイは男が好きであるからゲイであるように、性という存在形式を抹消した社会には、リアリティがない。それは、フェミニストによるミス・コンテスト批判が（抽象的なレベルでは説得力をもつとしても、具体的なレベルでは）説得力をもたないことを意味する。ゆえに吉澤は、「美という評価基準」をめぐる女性たちがどのような不平等感をもったとしても、その不平等感は、あくまで「個人的に解決すべき問題」として引き受けるしかないのであり（吉澤，1993:67）、それはミス・コンテスト問題を「社会的文脈と個人的文脈が交錯する場面」に位置付けることを意味する、とする（吉澤，1993:71）。

このように、ミス・コンテストという社会的文脈に位置付けることが比較的容易と思われる問題であってもその文脈に位置付けることが困難であるとの指摘がある。そうすると、個人的な文脈の最たるものである性的・恋愛関係を社会的な文脈に位置付けることは一層困難であろう。

以上から、同性愛男性の世界の「ルッキズム」を批判することは困難というほかない。

用の方法には大きな差異があることに注意を向ける必要がある。前川は同性愛男性が自身の悩みを解消する方法としてジェンダー特権を利用してきたと指摘するが、その背後には異性愛主義社会が存在することを忘却してはならない。つまり、同性愛男性の悩みは異性愛主義社会であることから生じているのである。したがって前川の指摘する同性愛男性のジェンダー特権の利用は一種の免罪符になると考えることができる。一方、同性愛男性だけの空間における視線の構図には、異性愛主義社会といったものは存在しない。すなわち、なにかしらの抑圧からの解放といった文脈で特権を利用しているわけではない。したがって視線の構図での利用は免罪符とはならない。これが前川と本稿でのジェンダー特権の利用の方法の違いである²²。

4.3 「男性身体の客体化」の困難

ここまで、同性愛男性に対する美の規範が機能していないこと、同性愛男性も「見る＝男性／見られる＝女性」という視線の構図を利用していることを論じてきた。ここでは、同性愛男性の身体の置かれた状況を女性、異性愛男性と比較し、そこから「(異性愛) 男性の身体の客体化」について簡潔に論じたい。

すでに述べたように、女性、同性愛男性、異性愛男性の順で「見られる」客体となっており、同性愛男性は異性愛男性と近い立場にいる。このことは、端的に言えば異性愛男性が「見られる」客体になることの困難さを意味する。すなわち、「見られる」客体になり得るはずの同性愛男性が、そうなり得ていないということは、同性愛男性よりも「見られる」客体になりにくい異性愛男性がそうなることはきわめて困難になる。

このことは「男性身体の客体化」を論じることの困難性も意味する。本稿では、男性身体の客体化（「見られる」客体）とその弊害を含めて「男性身体の客体化」と定義したが、男性身体の客体化がそもそも難しい状態にあることはその弊害を指摘する前提を欠くことになる。

石田かおりは外見に対する美意識が高い男性が出現したことを「男性の身体表現の許容度が高まって選択肢が増えたこと自体は大いに評価できる」としながらも、「これまで女性だけの問題であったところに男性が巻き込まれる方向性が見受けられる」

22 免罪符としてジェンダー特権を利用することは例外的であり、他の場面で同性愛男性がジェンダー特権を利用することは当然であるという批判があろう。しかし、同性愛男性による視線の構図での利用は、同性愛男性のみの空間での利用、つまり女性不在の場面での利用であることから他の場面での利用と区別できる。

という（石田，2005:7）。その女性だけの問題とは「女性は当人の意志にかかわらずすべて美的価値競争の土俵に乗せられ、見られ、選別され続けてきた」という問題である（石田，2005:7）。つまり、石田は性的客体化とそれによる弊害、すなわち、「男性身体の客体化」を問題視しているといえよう。

しかし、「見る」主体でありながら、「見られる」客体でもあるはずの同性愛男性であっても、「見る」主体としての位置に居座り続けている有様を本稿では析出してきた。つまり、「見られる女性／見る男性」という構図はそれを反転、あるいは軽減するような試みが見られても、（異性愛）男性が女性と同じ強度で「見られる」客体になることは容易ではなく、また「女性身体の客体化」を問題視するように、「男性身体の客体化」を問題視することもできない。

近年、男性美容ブームにより男性が美へ参入することができるようになり、男性の身体表現の許容度が高まっている。だが、このことはこれまでの「見る／見られる」という視線の構図の変化を促すことはない。このことは、男性は「見る」ことに居座り続けながら、「見られる」ことの快樂のみを享受することを意味する。すなわち、男性は美への参入メリットだけを取り入れ、デメリット（弊害）は依然として女性に押し付けられる。むしろ、男性が美へ参入することにより、女性に対する「美の規範」が一層強化される危険もあるため注視していく必要がある。加えて、北村が「とりわけ複数の男性性の中で外見を通して作動する不平等な権力関係が、階層的に秩序づける機制について考えなければならない」（北村，2021:124）と指摘するように、男性の身体表現の許容度の高まりによる男性間の外見による序列化の激化とその機制にも目を向ける必要があるだろう。

参考文献

- 飯野智子，2006，「望ましい身体とジェンダー：ダイエットと美容医療の捉える身体」，『実践女子大学人間社会学部紀要』3巻，153-165
- 石田かおり，2005，「岐路に立つ「メトロセクシャル」：現在の日本の男性の化粧表現に見られる問題点と解決案」，『駒沢女子大学研究紀要』12，1-13
- 石田仁，2019，「東京・新宿のゲイ・シーンにおける出会いと「多様性」」，『BLが開く扉・変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』，青土社，151-169
- 伊藤公雄，1997，『男性学入門』，作品社
- 江口聡，2006，「性的モノ化と性の倫理学」，『現代社会研究』第9号，135-150

- 2019, 「性的モノ化再訪」, 『現代社会研究』第21号, 101 - 114
- 大島岳, 2016, 「『性的冒険主義』を生きる: 若年ゲイ男性のライフストーリーにみる男らしき規範と性」, 『新社会学研究』第1号, 93-118
- 大山治彦, 1995, 「身体的男らしき・女らしきと自尊感情の関連について」, 『家族社会学研究』7巻7号, 69-79,135
- 岡井崇之, 2009, 「第二章 「男」らしきはどう捉えられてきたのか——「脱鎧論」を超えて」, 『「男らしき」の快楽——ポピュラー文化から見たその実態』, 宮台真司/辻泉/岡井崇之編, 勁草書房
- 岡田桂, 2006, 「セクシュアリティ化される男性性の理想: 1930—80年代の米国フィジカル・カルチャー雑誌における男性身体表象とホモソーシャル連続体」, 『体育学研究』61巻1号, 197-216
- 荻野美穂, 2002, 『ジェンダー化される身体』, 勁草社
- 風間孝・河口和也, 2015, 「同性愛と異性愛」, 岩波新書 1235
- 河口和也, 2004, 「「男性性」という矛盾——同性愛男性の視点から」, 『情況』第3期第5巻第10号
- 木谷幸広・河口和也, 2021, 「マッチングアプリ「9monsters ナインモンスターズ」におけるゲイの身体変容——リアル・スペース「ゲイバー」への影響」『広島修第論集』61巻2号, 1-17
- 北村匡平, 2021, 「男性身体とルッキズム」『現代思想』49巻13号, 117-126
- 金城克哉, 2010, 「「掘ってくれるタチいないっすか?」——沖縄県の出会い系掲示板投稿文の計量的分析」, 『論叢クィア』第3号, 39-61
- 島袋海理, 2021, 「恋愛からの疎外、恋愛への疎外——同性愛者の問題経験にみるもう一つの生きづらさ」『現代思想』49巻10号, 31-38
- 須長史生, 1999, 『ハゲを生きる——外見と男らしきの社会学』, 勁草書房
- 高橋幸, 2021, 「女性の外見的魅力をめぐるフェミニズムのポリティクス」『現代思想』49巻13号, 178-187
- 多賀太, 2006, 『男らしきの社会学——揺らぐ男のライフコース』, 世界思想社
- 千葉雅也, 2014, 「巻頭言 | イケメンであるとされるということ」, 『ユリイカ』第46巻第10号, 8-9
- ナオミ・ウルフ, 1994, 『女たちの見えない敵 美の陰謀』, 曾田和子訳, TBSブリタニカ
- 西井開, 2021, 『「非モテ」からはじめる男性学』, 集英社新書 1076B
- 西倉実季, 2005, 「「美」を論じるフェミニズムの課題——二元的思考を超えて——」,

- 『F-GENS ジャーナル』 4, 61-67
- 2021 「「ルッキズム」概念の検討—外見にもとづく差別」, 『和歌山大学教育学部紀要』 人文科学 71 巻, 147-154
- 藤田智子, 2005, 「青年期における男性の身体像に関する考察」, 『ジェンダー研究：御茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』, 8 巻, 79-98
- 伏見憲明編, 1999, 『クィアジャパン (Vol.1)：メイル・ボディクィアの 90 年代』, 勁草書房
- 2000, 『クィアジャパン (Vol.3)：魅惑のブス』, 勁草書房
- 細谷実, 2008, 「美醜としての身体——美醜評価のまなざしの中で生きる」, 金井淑子編『身体とアイデンティティ・トラブル——ジェンダー／セックスの二元論を超えて』, 明石書店
- マーゴ・デメッロ, 2017, 『ボディ・スタディーズ——性、人種、階級、健康／病の身体学への招待』, 田中洋美監訳, 晃洋書房
- 前川直哉, 2012, 「「見られる男性・見る女性」の系譜—絡み合う二次元と三次元」, 『ユリイカ BL オン・ザ・ラン!』 12 月号 第 44 巻第 15 号, 138-144
- 2017, 『〈男性同性愛者〉の社会史：アイデンティティの変容／クローゼットへの解放』, 作品社
- 森山至貴, 2012, 『「ゲイコミュニティ」の社会学』, 勁草書房
- 2014, 「「二丁目に捨てるゴミ無し」と人は言うけれど、」, 『ユリイカ』 第 46 巻第 10 号, 246-253
- 吉澤夏子, 1993, 「性という存在形式」『フォーラム』 第 11 号, 63-71